



西高新聞

NAGASAKI NISHI INFORMATION

信頼され続ける学校 学びがいのある学校 居場所のある学校

第306号

令和7年12月24日 発行

編集責任者 初村 一郎

http://www.nagasaki-nishi.ed.jp

校長室から

「ハンバーグ」

校長 初村 一郎

(高校を卒業して間もない、大学生になったばかりの女子生徒が書いた手記)

いよいよ私も西高を卒業する日が近づいてきました。西高新聞への寄稿もあと2回。その締めくくりを考えたとき、やっぱり「ハンバーグ」しかない。一昨年に続き再掲にはなりますが、いつ読み返しても涙がちょちょ切れる、ほっこりと心に染みる手記です。年の瀬に皆さんと想いを共有しながら心の栄養補給ができれば嬉しく思います。ぜひ読んでみてください。

3月にね、大学の合格者が発表されるやろ。第一希望の大学やったけん、本当に嬉しかった。それから1ヵ月、めっちゃ遊んだ。それまでは、受験勉強があって遊べなかった。1ヵ月があつという間に過ぎた。卒業式もあったし、大学の入学手続きもあったし、一人暮らしを始めるための家探しもした。実家は同じ福岡やけど、ちょっと家からは通えん。一人暮らしもしたかったし、そういう大学を選んだ。でも、帰ろうと思えばすぐに帰れる距離。お父さんも「九州から出たらいけん」って言ったし。入学する前は本当にワクワクして、ずっと受験勉強のプレッシャーもあって、それから解き放たれて、志望校に合格できた。卒業式が終わってすぐ、初めて髪を染め、パーマをかけた。それまでは、校則があつてそんなことできんかったしね。卒業式の次の日、美容院に行った。お母さんも今までは、髪の毛も洋服のこともいろいろさく言ったけど、もう何にも言わなかった。これからは、自分の好きな服を着ることができる。もうすべて自由って感じで、ウキウキしてた。何のサークルに入ろうか、何のアルバイトしようか、アルバイトしてどれくらい1ヵ月で稼げるんだろう。そんなこと考えて、もうワクワクした。毎日が楽しくて、一人暮らしはそれ以上に楽しそうで、早く一人暮らしを始めたいと心から思っていた。親から離れても、そんなに寂しくないうらうって、平気だろうって思ってた。私は長女だったから、親からもみんなからも、親に甘えていない、自立した子どもって思われていた。自分でもそう思ってた。でも、違ったんよ。

明日は私の引越しの日という夜。いつも通りお風呂に入り、テレビを見て、お母さんが晩ご飯作ってくれるのを見た。普段はお父さんも仕事の帰りが遅いやけど、この日はいつもより早く帰ってきてくれた。たぶん私が実家での最後の食事だと考えてくれたんやと思う。その日のメニューはハンバーグやった。ありふれたメニューだけど、お父さんも、弟も妹も、そして私も大好きなお母さんのハンバーグ。ハンバーグなんてファミレスでも、いつでも食べれるし、ソースだって特別なものではなく、市販のデミグラスソース使ってた。でも、私はお母さんのハンバーグが、なぜか大好きだった。「今日の夕食はハンバーグ」って言われたらすごく嬉しかった。小さい頃、お母さんが台所でお肉を上下にペタンペタンしていたの、ずっと見てた。今でもその嬉しさは私の中に残ってる。

「もう、今日は忙しかつたけど、あんたが最後やけんね。ハンバーグ作った。」お母さんがいつもの調子で笑うんよ。妹はその時、高校2年になるちょっと前、いい年して小3の弟に「うちのハンバーグの方がかいいやろ。よかろう。」とか、ちょっかいだして。弟も負けじと皿を替えたりして。これが毎日の光景だった。私はいつも少し引いて様子を眺めていた。一番でっかいとか言っても、それは妹と弟がそう言うだけで、実際には、そう大差なかった。だってお母さんが同じように作っていたから。

その日もそんなやり取りを醒めて眺めて「ばかやない、この人たち」とか言ったんだけど、そしたら弟が「姉ちゃん、最後やろ」そう言って一番でっかいハンバーグ譲ってくれた。妹も笑ってた。やっと5人、食卓を囲み、みんな揃って、いただきますして食べ始めたんよ。私はやっと食べれると思いながらハンバーグを一口、口に入れた。そしたら、食べれんごとなったんよ。箸が止まってしまって、ずっと下向いて、止まっていたんよ。そしたら、お母さんが、隣に座っていたお母さんが「なーん、泣きよるとね、あんた」って私の顔を覗きこんだ。私、泣きよった。涙も鼻水も次から次に出てきて、喉が絞まるような感じがして、あれだけ好きだったハンバーグが喉を通らなくて、箸が止まってしまったんよ。家族の前で泣くなんか、恥ずかしいやろ、妹も弟もおるし。最初のうちはどうやって泣き止もうか、どうやってばれないように泣こうかって考えよった。でも、もうお母さんに気づかれたらしょうがないっていうか、お母さんの「なーん、泣きよると」の一言で、もう涙が一気に溢れてきて、もう完全に箸を置いて、わんわん泣いた。そしたら、お父さんがティッシュを持ってきてくれて、そーっと差し出してくれたんよ。なんか、そしたら余計に涙が溢れて、拭いても拭いても意味ないくらいに溢れて、出続ける涙を拭き続けた。

そしたら、お母さんが「寂しくって、泣いてくれよとね。泣いてくれんって思っとな。なんか嬉しかね。ねえ、お父さん。」そう言いながらお母さんも泣きよんよ。お父さんが鼻をずりずりいわせて「そやな」って答えて。弟と妹は最初、何事が起きたんやろって、びっくりしてた。でも、空気を読んでか、読まずか「おいしか」って、わざと大きな声で言って、場を盛り上げようとしてくれた。しばらく泣いたら、落ち着いて「久しぶり、こんなに泣いた。すっきりした。お腹空いた。」ってまた食べ始めた。

まさか自分が泣くとは思わなかった。初めて、実は寂しかった自分に気が付いた。再び食べ始めたハンバーグ。おいしいって思ったら、また泣けてきたけど、もうついには泣き続けながら食べ続けた。ぐちゃぐちゃの泣き顔を妹と弟に見られるのは恥ずかしいけん、できるだけずっと下を向いていた。だけど、ちらっと顔を挙げると、弟、妹、お父さんを見ると、そして目を真赤にして笑っているお母さんの顔が見えて、なんか頭の中がいろんなことを思い出した。あの時何を食べたとか、どんな話をしたとか、どんな喧嘩をしたとか、叱られたとか、お母さんのこと、お父さんのこと、妹・弟のこと、明日から一人だって思ったら、また泣けてきた。お母さんのハンバーグすごく美味しいって鼻をずひずひいわせながら食べた。あれだけ泣かんかった私があのハンバーグを一口食べた瞬間に涙が出てきたんよ。すごく不思議やったけど、あの一口が、今までのいろんなことを思い出させてたんだろうって思う。「食」ってすごい力を持っていると思う。「食卓」ってすごいと思う。「家族」ってすごいと思う。

第45回同窓会講演会 心に響く人生の達人セミナー 10月30日(木)

創立記念日には、社会の第一線で活躍されている本校卒業生を講師に招いて同窓会講演会を開催しています。今年は、本校第40回卒業生である森貴信(もりたかのぶ)氏(株式会社マグノリア・スポーツマネジメント代表取締役)をお招きし、『スポーツを仕事にするなんて!』と題して講演をしていただきました。森氏は在学中野球部に所属。卒業後、筑波大学の国際関係学部に進学されました。大学卒業後は慶応大学大学院経営管理研究科を卒業しMBAを取得。その後V・ファーレン長崎設立に参画、サガン鳥栖、埼玉西武ライオンズなどスポーツビジネスの経営やラグビーワールドカップ2019組織委員会や日本陸連マーケティングディレクターなどスポーツビジネスに携わることで社会貢献に尽力されております。講演では「したいことがあるのか?若い時の苦労は買ってでもせよ、できること・やりたいこと・すべきことのバランスが大事、自分しかできないことを楽しくやりとげること」と話され、「友人に助けられることが多く友人は宝である」「可能性は無限大」と言われ、最後に「勇気を持つこと」「高みを目指すこと(本物は楽しい)」と伝えられました。在校生からの質問に対し、「スポーツとのかかわりで人が健康になると医療費が減少し、その分他の分野に公共投資ができ地方が活性化する」と答えられていました。

同窓会主催による講演会も今年で45回目を迎えました。講演会にご出席いただいた村田同窓会会長をはじめ同窓会の方々には、講師の人選などさまざまなご支援・ご協力をいただきました。在校生のために、各界の第一線で活躍されている先輩方から、貴重なお話を直接聴くことができる機会をいただいたことに、心から感謝申し上げます。



【同窓会事務局 山本 禎明】

物理部が全国規模のコンテストで活躍

物理部は、本年度、複数の全国規模のコンテストに出場し、それぞれの大会で成果を上げることができました。

11月22日には、東京都で開催された「第33回衛星設計コンテスト最終審査会」に出場しました。本コンテストには全国から26件の応募があり、書類審査を通過した6テーマのみが最終審査会に進出しました。本校からは2つの研究テーマが選出されました。1つ目のテーマ「超小型衛星におけるビット反転の対策」では、宇宙空間の放射線によって発生する電子機器の誤作動を修復する方法について研究を行い、その内容が高く評価され、電子情報通信学会賞を受賞しました。2つ目のテーマ「CubeSat 設計支援バス Palette」では、実際の超小型衛星と同じ大きさの模擬衛星を製作し、高校生でも扱いやすい設計を提案しました。この研究は、宇宙科学振興会賞および日本宇宙フォーラム賞のダブル受賞となりました。いずれの研究も、審査委員の先生方から高い評価をいただきました。

また、11月30日には、九州工業大学で行われた「缶サット甲子園2025 九州地方大会」に出場しました。缶サットとは、空き缶サイズの模擬人工衛星を用いた競技で、地上約40メートルから落下させ、事前に設定したミッションをどれだけ正確に達成できるかを競います。当日は、設定したすべてのミッションをミスなく実行することができ、九州地区大会優勝を果たすとともに、全国大会への推薦をいただきました。今後は、3月に予定されている全国大会に向けて、さらなる改良を重ねていく予定です。

このように、本年度は全国規模の宇宙関連コンテストにおいて、2つの全国大会への出場という成果を挙げることができました。物理部では、今後も宇宙に関する研究を中心に、電子工作やプログラミングに取り組み、これまでの伝統を大切にしながら活動を続けてまいります。

【物理部顧問 田中 潤】



西高イルミネーション点灯式・受験横断幕披露 9日(火)

12月9日(火)に横断幕を全校生徒に披露しました。今年度の漢字は「西風快進」。西高からの風を受けて3年生が力をいかに発揮することを願って選びました。

また、同日にイルミネーション点灯式を実施し、ギター部や吹奏楽部の演奏とともに無事点灯することができました。前日には、ボランティア委員や各種部活動とともに準備を行いました。このイルミネーションも3年生の受験や1、2年生の部活動、勉強を応援する思いが込められています。生徒の皆さんがこれを見て少しでも勇気づけられることを願っています。

【生徒会役員 山口 陽大】



ベトナム修学旅行を終えて

12月初頭、私たちはベトナムへ修学旅行に出かけました。現地高校を訪問した際には、生徒同士の交流会が行われ、ベトナムの高校生の堪能な英語や日本語に大きな刺激を受けました。積極的に会話を楽しむ姿が見られ、異文化に触れることで「もっと学びたい」という意欲が一層高まったようです。

滞在中は、現地ならではの味わい深い料理も楽しみました。最初は慣れないメニューに戸惑う生徒もいましたが、どの料理もおいしく、食事を通してベトナムの文化に触れる良い機会となりました。

また、歴史を感じる遺跡巡りでは、ガイドの説明に熱心に耳を傾けながら、長い年月をかけて受け継がれてきた文化や歴史に思いをはせる姿が印象的でした。実際に自分の目で見て学ぶ体験は、教室では得られない大きな学びとなったようです。

今回の修学旅行を通して、生徒たちは異文化理解を深めるとともに、新しいことに挑戦する姿勢も育まれました。この経験が今後の成長につながることを期待しています。

【2学年主任 浦 史子】

～生徒感想より～

○現地の高校生が英語と日本語で話しかけてくれ、とても嬉しかったです。交流を通して語学の大切さを実感し、自分ももっと勉強しようという意欲がわきました。

○ホテルの豪華な朝食バイキングはどれもとてもおいしく、特にベトナム料理の定番フォーが気に入りました。毎回の食事が楽しみで、食文化を身近に感じる良い経験でした。

○日本とは全く違う景色に驚きました。遺跡巡りでは長い歴史の深さを強く感じ、教科書だけでは分からない学びを得ることができました。

